

人と樹木の橋渡し

22期樹木医 (2012年・東京都) / NPO法人 樹木生態研究会 事業推進委員長 安達 菜菜

樹木医資格取得に至るまで

子どもの頃から、学校帰りに草花を摘んだり、庭の草木の世話をすることが好きでした。植物と関係のないインテリア科に進学しましたが、課題に取り組むうちに建物の内側よりも外側の空間づくりに心惹かれ、縁あってランドスケープの設計事務所にアルバイトから始めて12年程勤めました。

働き始めた頃、長野冬季オリンピック選手村の外構設計業務の中で建築設計者への配布資料として、長野に植栽可能な植物リストを作りました。何冊もの植物図鑑に埋もれ、植物について調べる日々が楽しくてたまりませんでした。独学でしたが、物件ごとに現地の自然植生や環境、特性などを調べ、植栽図に反映し、現場が完成する喜びは格別でした。その後、実験農園を作ったり、管理にも携わりましたが、樹木医になるなど自分には無理だと諦めていました。

出産のために退社して仕事から離れていた頃、植物についてもう少し勉強したいと思い立ち、東京農業大学のオープンカレッジ講座で堀大才先生の講座を受講しました。最初は理解できない語句が多く、ノートをとるだけで精一杯でした。受講するたびに、今まで設計業務で良いと思い選択してきたことにたくさん間違いがあったと気づき、とてもショックを受けました。しかし、樹木についてもっと知りたい！ という気持ちが強くなり、数年受講するうちに、ダメでも受けてみたら？ という主人の言葉に後押しされ、3度目にしてやっと合格することができました。

資格取得後の変化

合格後は研修会等も多く、同期でも年に数回研修会を企画開催し、NPOの講座企画や支部の役員、広報部の編集委員等をさせていただく中で、相談できる先輩方や仲間ができました。資格をとる前より、格段にさまざまな情報を知り得る機会が増えました。

現在は主婦業が中心ですが、NPOの事業推進のお

手伝いをしながら、毎木調査や名木などの樹木診断、街路樹診断や機械診断など、少しずつさまざまな業務に携わる機会に恵まれ、そのたびに多くの反省や改善点がありました。特に診断本数が多い現場では、一緒に調査する先輩や仲間各々が診断方法や道具等を工夫して互いに学び合い、病虫害情報等を情報交換し、私にとって大きな収穫となっています。

一方で、依頼者の方々へ説明をする際には、樹木医としての言葉の使い方の難しさや責任の重さを痛感しています。中でも機械診断は画像で説明できる資料としてとても有効ですが、不安にさせて伐採を促す結果になることもあり、外観や土壌等の周辺状況、管理状況等を総合的に判断し、最終的な診断結果を出さなければなりません。そのためには、樹木の構造や生理だけでなく、新たな病虫害、治療法、診断機器等、広い分野についての情報が必要です。今後でもできるだけ研修や勉強会などに参加し、さまざまな分野の方々と互いに連携、協力して、樹木の生育環境をより良くしたいと考えています。

樹木医として

樹木を取り巻く環境は日々厳しくなっています。温暖化や新たな病虫害等の環境問題だけでなく、樹木からたくさんの恩恵を受けているはずの人間が、理解不足により樹木を傷つけ、樹勢が衰退するケースも目立ちます。ある名木の持ち主の老婦人は、毎朝丁寧に家の周囲の落ち葉を掃き、庭の片隅にはすり減った竹箒がたくさんありました。近隣からのクレームに疲れ、後継者への負担を心配し、強剪定や伐採されてしまう樹木も少なくありません。

樹木医として診断や治療を行うだけでなく、樹木の役割や生態、管理方法などを持ち主や利用者のみならず、都市計画や設計、維持管理者等、さまざまな立場の方々へ分かりやすく伝える橋渡し役になれるよう今後も精進し、見る人が癒やされるような健康な木々や樹林を維持できる一助になりたいと思います。